

## ニュータウンと日本人

高橋伸夫

「筑波へ赴任するには、長ぐつと懐中電燈が必要ですよ」といわれて、筑波に住みついてからすでに8年が過ぎようとしている。粘土層の上に薄く関東ロームが覆った地面は、雨が降ると田ぼのようになり、筑波へ移った当初はしかも至るところ工事中であったために長ぐつは確かに必要であった。また、当時は筑波大学と東京教育大学の併任であったため、一日おきに東京へ通勤していた。夜、バス停に降りると、そこは水田の真中であり、勿論街燈もないため月夜でなければ、細いあぜ道を通して自宅にたどりつくには懐中電燈も不可欠であった。このように筑波研究学園都市の開発当初の悪戦苦闘の話しも一昔前の思い出となろうとしている。昭和55年度には、大半の施設の建設も完了し、計画された機関も移転したということで、学園都市の概成ということになった。

建設途上の時代から概成に至るまで当地に住んで新しい都市が建設されてゆく様子をつぶさに観察していると、さまざまなことを考えさせてくれる。ニュータウンは、建設する国民の「理想の都市像」がそこに具現されるといわれる。筑波にはじめて訪れた人は、広い道路や高層の建築物を見て、アメリカに來たみたいだともいう。計画者の脳裏には、アメリカの都市のイメージがあったのかもしれない。しかし、区画整理事業区域には、無秩序な市街地化が進み、一方で桑畑などが残存する景観を見ると、やはりここは日本であると感じてくづく感じることになる。その無秩序な市街地化

をどうにかして良い方向へ誘導しようとして、土地利用の規制が検討されたが、決まったことはただ一つであった。それは、最小画地（宅地などの最小の敷地）が165m<sup>2</sup>ということだけであり、このことは日本人は土地に対する私権が強く、土地利用の規制がいかに困難であるかを物語っている。

また、ある意味ではこの新都市は、全く奇妙なものともいえる。それは、新しい都市を作るために必要な機能を有した事業主体が欠如していることである。すなわち、国の機関の施設を計画し建築する組織はあるにしても、現地において一つの都市を総体としていかに計画し、実現して維持・運営するかという統一的な責任と機能する組織がどこにもないのである。したがって、それぞれ移転した国の機関、県、町村などが明確な責任範囲もわからないままに、建設を進めてきたことが多々あったように思われる。しかし、日本においては都市としても最新鋭の設備と最高水準の施設が出来あがろうとしている。このように有機的な組織がなくとも何十万人という人口を抱える新都市ができることは、全く納得がゆかない。日本人は、組織を作ることが不得意であっても、それを上まわるほど個人の犠牲をいわず、組織の欠如を埋め合せる善意の持ち主であり、さらに短期間に仕事を完することができる優秀な民族なのかなあと、筑波で考えてみている。

（筑波大学）